

協賛をいただきました!

これまで、数多くの企業様から温かいご支援を賜り、誠にありがとうございます。
7月には、以下の企業様からご協賛をいただきました。心より感謝申し上げますとともに、有村町長から感謝状が贈呈されました。
皆様のご支援は、「わたSHIGA輝く国スポ・障スポ」大会の開催に向けて、大きな力となっております。引き続き、町をあげて大会の成功に向けて取り組んでまいります。

近江印刷株式会社

7月3日、ポケットティッシュ7,000個および町制施行20周年記念を含めたオリジナルノート1,000冊をご提供いただきました。

同社の里西代表取締役社長は「今回はご縁がありまして、町制施行20周年記念を兼ねたオリジナルノートを作成しました。国スポについては、学生の頃愛荘町で国体が開催されたことを覚えています。また滋賀県で開催されることを嬉しく思います」と話されました。



7月22日、テント2張、タオル400枚(306,000円相当)をご提供いただきました。

同社の藤居代表取締役社長は「44年ぶりの大会ということで、人生の中においてなかなか関わることができない経験だと思います。青年部長の際も多くの方に支えていただきました。ぜひ大会で有意義にご活用ください」と話されました。

酒正株式会社

株式会社高橋重機

7月22日、ワンタッチテント2張と風押えおもり2個(300,000円相当)をご提供いただきました。

同社の高橋代表取締役社長は「今回国スポ・障スポが愛荘町で開催されるということで、ぜひ協力させていただきたいと思っていました。熱中症対策としてもぜひテントをご活用ください」と話されました。



株式会社CARCLE および京滋キャリア株式会社

7月31日、テント2張、トートバッグ、ペン、クリアファイル(600,000円相当)をご提供いただきました。

同社の田中代表取締役社長は「国スポは44年ぶりの開催ということで、なかなかない機会にこうして地域に貢献することができ嬉しく思います」と話されました。



夏原工業株式会社

7月31日、ワンタッチテント2張(340,000円相当)をご提供いただきました。

同社の湊代表取締役社長は「この協賛をきっかけに、アーチェリーに興味を持ち、大会も観覧させていただこうと思っています。今回こうした形で地域に貢献できることを嬉しく思います」と話されました。

人推協だより

ほっと・あい 第233号

愛荘町人権教育推進協議会
〒(事務局) 教育委員会生涯学習課
☎0749-42-8015 FAX 0749-42-8014

地域・団体
推進部会

「今日の社会や家庭における 子どもの人権を考える」

現代の社会や家庭では、経済や時間の「効率化」が優先される傾向があります。地域・学校・家庭でも大人中心の効率化が進み、子どもたちはその流れに組み込まれながら日々を過ごしています。関わる大人も限られ、多くは家族や学校の先生、スポーツや文化の指導者のみ。子ども自身の意思で動く場面は少なく、大人の都合に合わせた生活になりがちです。

最近では、友だちと自由に遊ぶ機会も減少しています。ある子ども同士の会話では、「A君とは遊ぶから、B君とは遊ばない」といったやり取りがあったそうです。以前は、集団で一緒に遊び、その中で自然と協調性を学ぶ姿が見られましたが、今は個別的・限定的な関係が多くなっています。

また、塾やスポーツ団体の予定がない日にも、子どもたちが自分で過ごし方を考えず、保護者に自分の身を置く場所を求めるケースも増えています。保護者の帰宅までゲーム漬けとなり、夜も保護者と一緒に動画やゲームに没頭する生活が常態化している家庭もあると聞きます。

こうした状況の中で、子どもたちは「自分の意思で遊ぶ」「目標を共有して協力する」といった機会を失い、「お客さん」のように生活している状態に陥って

いるのではないのでしょうか。思春期の反抗が見られず、保護者の判断に従えばよいという依存的な傾向も気がかりです。

本来、子どもは遊びの名人でした。しかし今は、大人が用意した環境の中で「黙って楽しんでくれる子」が理想とされる風潮もあります。その結果、大人になってから「主体性」が求められても発揮できず、離職や転職が増え、退職代行や転職サービスの利用が増加する一因ともいわれています。

日本では、このような「主体性」「協働性」の低い子どもたちよりも、外国籍の意欲のある人々の雇用に着手する企業が増加傾向にあります。10年後～20年後の次代の社会の担い手のあり方を考え、日本社会、地域社会、家庭のあり方を根本的に考える岐路に立っているようにも感じます。

このような課題の中、子どもたちが将来の社会で活躍できるよう、幼少期から体験や人との関わりを重ね、小学校では仲間と目標を共有しながら自己実現を図る力、中高では探究心をもって企画・実践する力を育てることが大切です。

家庭・学校・地域が連携し、目指す子ども像を共有して実践していく必要があります。

発達段階による支援と主体的な活動を調整

